



(2005年5月)

【本学会活動状況】

1. 大会開催報告

平成17年度大会は、3月29日(火)から31日(木)まで3日間にわたり静岡グランシップコンベンションセンター(静岡市)で開催された。幸い天候にも恵まれ、18名の名誉会員、永年会員のご臨席を賜り、総勢950名の参加者があった。特に、96歳の恩師・岡部徳夫先生のご出席には、一同感動した。総会では、通常の審議、学会賞3名、学会奨励賞3名、論文賞2名、新名誉会員2名・永年会員5名の推挙状授与及び甲元啓介先生への貢献者表彰状の授与があった後、会長及び学会賞受賞者による素晴らしいご講演があった。29日午後からは、5会場に分かれて講演が始まった。講演題数は、443題と予想を上回る盛況で、タイトなスケジュールであったにもかかわらず、各座長のご協力ですムーズに進行された。各会場で活発なご討議があったと伺っている。今年度は、ハプニングへの対応に自信が無く、一部の例外を除いて、ご発表はOHPでお願いした。今後、動画での発表が増えてくると、明治大学で対応されたように、液晶プロジェクターによる発表にしていかなければならないのかもしれない。

29日夜の恒例の懇親会は、同センター内の大ホール“海”で開催され、約550名の参加があった。後藤正夫大会運営委員会顧問の乾杯の音頭で開宴され、静岡の銘酒も一役買ってか、大いに盛り上がり、会員相互で親交を深め合いながら、英気が養われた。

本大会の特筆すべきこととして、プログラム関連をすべて担当して下さった名古屋大学との共同開催であることを再度ご紹介したい。川北先生を始めとし名古屋大学の先生方には、多大なご迷惑をおかけしてしまった。ただ、はからずも、弱小メンバーが本大会を開催する一方策として、一石を投じた形になった。また、中部ブロックの運営委員の皆様には、各会場での進行の一切をお引き受けいただいた。特に、県内の運営委員には、準備の段階から全体計画、会場や受付の設営、懇親会の企画などに奔走して

いただいた。学生の献身的な協力には、多くの方々からお褒めの言葉を頂戴し、不出来な教師だけに感慨も一入であった。これらのお世話になった皆様には、瀧川運営幹事長ともども深謝している次第である。なお、予想以上の盛況で、随分余裕をもって用意した要旨集が足りなくなってしまう、一部の方々には、増刷りをして後日発送ということになってしまいました事を心よりお詫び申し上げたい。

(露無慎二)

2. 研究会開催報告

(1) 第8回植物病害生態研究会

第8回植物病害生態研究会は、平成17年3月28日(月)に静岡グランシップにおいて、「植物病害生態研究のフロントライン」のテーマで開催された。参加者は121名で、内訳は大学11名、都道府県41名、独法38名、民間30名、その他1名であった。生産現場の最前線(フロントライン)で問題となっている病害に関する講演であったことから、県および独法の試験研究機関からの参加が多かったが、大学関係者、特に学生の参加が少なく、今後の課題となった。講演は、一般講演として九州沖縄農研の中島 隆氏が「ムギ類赤かび病とマイコトキシン汚染低減へ向けた研究戦略」、長野野花試の藤永真史氏が「レタス根腐病菌レース分化の実態解明とその防除への応用」、佐賀農業セの山口純一郎氏が「ナスすすかび病の発生生態と防除」、と題して講演を行い、座長を竹内 徹氏(北海道中央農試)、中村 仁氏(果樹研)、井上幸次氏(岡山農試)、がそれぞれ務めた。前半3題の各テーマに関しては、植物病原菌が産生するマイコトキシン(かび毒)による食品の安全性に関係した話題と全国の野菜産地で問題になっている難防除病害を集めたことから、参加者の関心が高く、活発な総合討議が行われた。4題目は特別講演として真岡哲夫氏(北海道農研)が座長を務め、農業環境技術研究所の三中信宏氏が「親の因果が子に報い」——生物のすべては系統進化の産物である」と題した講演を行った。植物病理分野でも

系統樹をつかった解析で分類や進化を議論している研究は多いが、系統樹作成の理論的基礎を十分理解して利用している者は少なく、本講演により系統推定の仕組みや、結果の解釈について注意すべき点が明示され、活発な議論がなされた。今後、系統推定の方法論を生態研究にどう生かしていくか考えていきたい。次回は大会翌日（6月6日）に北海道大学学術交流会館において開催する予定である。

本研究会は植物病害の生態を研究する若手の研究者が相互交流することを目的に、15年程前に始まった会で、8年前から学会に正式に認知された研究会として活動している。企画・運営に参画していただける方を新たに募集しているので、希望される方は代表幹事の中島（九州沖縄農研）ntakashi@affrc.go.jp までお知らせ願いたい。（中島 隆）

(2) 第9回バイオコントロール研究会

第9回バイオコントロール研究会は、静岡県植物防疫協会の共催により平成17年3月28日（月）に静岡グランシップで約200名の参加を得て開催された。今回は、開催事務局を担当していただいた静岡県防除所牧野孝宏氏らの企画により、「微生物の生物防除剤としての機能開発と普及課題」のテーマで、基調講演の後、第一部の「生物防除剤の機能開発と普及課題」では4題、第二部「トピックス」で2題の講演発表がなされた。基調講演では、アリストライフサイエンス(株)の和田哲夫氏から「生物防除剤の開発と普及に関する国内及び海外動向」と題して最新情報の提供があった。続いて、第一部に移り、京都府農業資源研究センター小坂能尚氏からは「ズッキーニ黄斑モザイクウイルス弱毒株水溶剤の開発」、クミアイ化学工業(株)渡辺 哲氏からは「*Trichoderma atroviride* SKT-1 株（エコホープ）のイネ種子消毒剤としての開発と普及課題」と題して話題提供があった。午後には、茨城県農業総合センター渡邊 健氏による「非病原性フザリウム菌の機能開発と今後の展望」、AgraQuest Inc. の Donald W. Edgecomb 氏による「*Bacillus subtilis*（インプレッション）の機能開発と防除効果」に関する講演が行われ第一部を終了した。第二部では、「バイオフォトンによる抵抗性誘導の評価」について静岡県農業試験場加藤公彦氏が、「根圏微生物が誘導する植物の病害抵抗性」に関して理化学研究所染谷信孝氏が話題提供した。第二部終了後、土屋健一（農環研）会長の司会のもとに、百町満朗（岐阜大学）、和田哲夫（前述）、渡邊 健（前述）、JA 全農宗 和弘、牧野孝宏（前述）、對馬誠也（農環研）、の各氏をパネラーとして「開発における問題点」、「普及における問題点」、「研究機関への提言」の項目に沿って1時間以上にわたり活発な総合討論が行われた。総合討論では、

会場からも多くの意見が出されるなど、盛会裡に終了した。なお、講演要旨集（2,000円）をご希望の方は、對馬（農環研）seya@affrc.go.jp までご連絡いただきたい。

（對馬誠也）

(3) 第15回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウム

平成17年3月28日、静岡市のグランシップにて、160名の参加のもとに開催された。茶の栽培でも全国的に広く知られる地元を代表して、西島卓也氏（静岡茶試）が「静岡県における薬剤耐性菌の発生と防除対策—茶病害の場合—」について講演した後、減農薬栽培と耐性菌の関係が取り上げられ、「青森県におけるリンゴの散布回数削減防除体系と耐性菌」を福士好文氏（青森農総研りんご試）が、また「ナシ減農薬栽培の現地事例」が菊原賢次氏（福岡農総試）によって紹介された。各種の困難を伴いながらも殺菌剤散布回数の削減が進む一方、高い効果や広い防除スペクトラム、残効性などを兼ね備えたストロビリン系剤（QoI 剤）やDMI 剤への偏重が目立ち、耐性菌問題も危惧された。

午後の部では、阿部浩人氏（JA 全農）より、耐性菌の広域伝搬にも関係する「イネ種子の流通実態について」興味深い紹介があった。次いで、最近東北にまで分布地域が拡大しているイネいもち病菌の MBI-D 剤耐性菌、さらには今後耐性菌発生が心配される QoI 剤について2題紹介された。根本文宏氏（福島農試）が「イネにおける MBI-D 剤、QoI 剤耐性菌対策」を、また同じく論客として名高い石黒潔氏（東北農研センター）が、「Scale-free ネットワークとしてのいもち病伝染経路と耐性菌対策」を論じた。ともに重要な内容であったが、講演後十分な時間を議論に割けなかったのは残念であった。シンポジウムを締めくくって、オランダ・ワーゲンゲン大学の M. de Waard 氏が「Impact of drug transporters on virulence, fungicide sensitivity and multidrug resistance」と題して、薬剤耐性の発現のみならず多岐にわたる ABC トランスポーターの機能について、その制御の可能性も含めて講演した。

講演要旨集購入（1部2,000円）を希望される方は研究会事務局（農環研農薬影響軽減ユニット、TEL & FAX: 029-838-8307, E-mail: hideo@niaes.affrc.go.jp）までご連絡下さい。なお次回のシンポジウムは、植物病理学会大会最終日の翌日、平成18年6月6日、札幌市にて開催される予定である。（石井英夫）

(4) 第6回植物病原菌類談話会

平成17年3月28日（月）東静岡駅前の静岡グランシッ

プにおいて「*Rhizoctonia* 属菌 <もう *Rhizoctonia* も怖くない>」をメインテーマとして開催された。出席者は132名で、多方面の参加者であったが、特に若い研究者が多く見受けられた。最初に信州大学農学部久我ゆかり氏より「*Rhizoctonia* の基礎と共生 *Rhizoctonia*」について講演があり、基礎編では *Rhizoctonia* の分離から同定までの基本的手法が詳細に解説された。また、共生編ではラン科植物と共生する *Rhizoctonia* の紹介があり、あまり馴染みがないものの興味深い分野を垣間見ることができた。次に、「*Rhizoctonia* の菌群に名前を付けよう」と題して元北海道大学農学部生越 明氏より *Rhizoctonia* の分類の新しい試みについて提案があった。また、名城大学農学部荒川征夫氏より「水田生息性 *Rhizoctonia* を例にした発生生態学」と題して、分子生物学的手法の分類への応用、さらには個体群の識別法の紹介があり、本属菌の発生生態の解明への応用研究の事例が示された。後半二つの講演は現場の話として、富山農業技術センターの多賀由美子氏から「花の病気を通して *Rhizoctonia* を考える」と題して、実際に病気が持ち込まれたときどのようにして *Rhizoctonia* による病気かどうかを区別する方法など現場の病害診断での重要ポイントから、正確な同定法までの紹介、さらに病害防除対策を考える上での病原菌の伝染経路など生態を知る重要性が紹介された。次に、理研グリーン・グリーン研究所の早川敏広氏より芝草に発生する *Rhizoctonia* 病について、同じ草種でも季節により異なる *Rhizoctonia* 病が発生することが紹介され、診断法や発生生態について説明があった。

談話会修了後、懇親会も開催され、これからの談話会のテーマについて意見が交わされた。また、アンケート調査も行い、幹事会では特に現場で問題となる課題を取り上げて談話会を進める方向の必要性を確認した。より活発な会の運営には多くの方々からの御意見が必要です。御意見などありましたら岐阜大学流域研科学研究センターの景山幸二 kageyama@green.gifu-u.ac.jp までお願いいたします。

(景山幸二)

【学会関連各委員からの報告】

1. 日本学術会議微生物学研究連絡委員会報告

平成17年3月14日に本年度第4回の委員会が日本学術会議第6部会議室で開催された。委員長から学術会議における総会及び第6部会の報告があった。続いて、①富田幹事より、IUMS2011の札幌開催誘致についての計画案を Executive Board Member に送り正式に立候補したとの報告があった。現時点对抗馬がない事から、7月のサンフランシスコでの総会で決まる可能性が高いとの事であ

った。この決定を受けて、正式の組織委員会を発足させたいとの説明があった。なお、IUMS から3つの Division の各 officer 推薦の依頼を受けて、Bacteriology and Applied Microbiology では Vice Chairman に渡邊 信幹事を推薦する事とし、Virology では候補者を出さず、Mycology では日本菌学会に一任する事とした。②前回委員会の協議に基づいて日本微生物学協会連盟構想(案)が紹介され、意見交換を行い、原案に修正を加えて、今年9月末までに運営組織を立ち上げる作業を行う事にした。③上記連盟の設立に向けて7月2日に学術会議講堂でシンポジウムを行う事にし、パネルディスカッション及び微生物学関連のトピカルな話題の講演で構成する事とした。④渡邊幹事から、OECDにおける微生物資源保全認証に関して、フランスが中心となり UNESCO における生物多様性国際条約の提案がなされた事や、米国で NEON (National Ecosystem Observation Network) が6億円規模で立ち上がり、微生物を含む生態系における相互作用が検討されている事の報告があった。(露無慎二)

2. 日本学術会議植物防疫研究連絡委員会報告

平成16年11月5日に第4回委員会と、午後から公開シンポジウムを開催した。その概要を以下に記す。

<委員会の概要>

- (1) シンポジウムについて、これまでの準備状況、運営要領の確認を行った。
- (2) 前回委員会以後の学術会議の活動についての説明に続き、学術会議と学協会との関係、会員の選考、新しい体制での活動、について討論を行い、各学協会での関心を喚起するための努力が必要であることを確認した。
- (3) 今後の本委員会の活動について討議した。第6部の課題に関係している生物汚染、遺伝子汚染をテーマとして、さらに勉強、討論を重ねることとなった。

<公開シンポジウムの概要>

今期本委員会の課題のひとつである「農水産生態系における生物汚染」に関する議論を踏まえて、日本学術会議・講堂において、シンポジウム「導入生物・遺伝子のリスク評価と管理」を開催した。

冒頭に、学術会議会員の大川秀郎氏に今までの議論の背景と概要をお話しして頂き、専門分野の各先生方の講演の導入とした。引き続き、環境研究所の五箇公一氏に「輸入生物(天敵など)のリスク」について、畜産草地研究所の黒川俊二氏に「輸入生物(植物)のリスク」について、農業生物資源研究所の田部井豊氏に「遺伝子組換え作物のリ

スク」について、それぞれ実例と問題点を整理・紹介して頂き、実際の「リスク評価と管理」について、どのように考え対処すべきか、農業環境技術研究所の山村光司氏にご講演頂いた。最後に、「開発企業での遺伝子組み換え作物のリスク管理に対する取り組み」を日本モンサント(株)の山根精一郎氏にご紹介頂いた。講演後、一般参加者約200名と各演者とのパネルディスカッションを行い、活発な論議を経て、相互の認識を深めることができた。(寺岡 徹)

3. 日本農学会報告

平成17年度(第76回)日本農学会大会が、平成17年4月5日(火)午前10時より東京大学山上会館にて開催された。本年度の日本農学賞および第42回読売農学賞の受賞者は、本学会の道家会長を含む次の8氏である。

- 1) 雑草の生物学的・生態学的特性に基づく管理法の構築 京都大学教授 伊藤操子
- 2) インフルエンザウイルスの生態に関する研究 北海道大学教授 喜田 宏
- 3) 家畜卵子の選択的形成、成熟及び死滅の制御機構の解明に関する先駆的研究 東北大学教授 佐藤英明
- 4) 植物における感染防御応答の分子機構と耐病性強化に関する研究 名古屋大学教授 道家紀志
- 5) 木材物性の単純モデル化とその実証的応用に関する研究 同志社大学教授 則元 京
- 6) 土壌圏・機械システム力学のモデリングとその計算力学の確立 九州大学教授 橋口公一
- 7) 酸性土壌における生産性の向上を目的としたアルミニウム毒性機構の解析と耐性植物の作出 岡山大学教授 松本英明
- 8) 植物生長調節の技術基盤開発に関する研究 理化学研究所主任研究員 吉田茂男

また同日、受賞者講演に引き続きパネルディスカッション「農学の課題と展望」が開催され、受賞者を中心に農学とは何かという深遠なテーマで活発な議論がなされた。

(夏秋知英)

【今後の学会活動の予定】

1. 平成17年度部会開催予定

- (1) 北海道部会：平成17年10月20～21日
北海道農研センター(札幌市)
- (2) 東北部会：平成17年9月26～27日
弘前大学(弘前市)
- (3) 関東部会：平成17年9月15～16日
東京農工大学農学部(府中市)

- (4) 関西部会：平成17年9月17～18日
名城大学(名古屋市)
- (5) 九州部会：平成17年9月7～8日
立命館アジア太平洋大学(別府市)

2. 談話会開催予定

- (1) 第41回植物感染生理談話会：平成17年8月18～20日
かがわ国際会議場(高松市)
- (2) 第23回植物細菌病談話会：平成17年9月29～30日
ホテル海辺の果樹園(高知市)

3. 平成18年度大会

- 日 時：2006年6月3～5日
場 所：札幌コンベンションセンター(札幌市)

【海外研究集会情報】

1. 2nd Asian Conference on Plant Pathology 2005 (ACPP 2005): Singapore, June 25–28, 2005.
<http://www.dbs.nus.edu.sg/acpp05/>
2. International Union of Microbiological Societies (IUMS2005): San Francisco, USA, July 23–28, 2005.
<http://www.iums2005.org/>

【書 評】

- (1) 佐久間勉著：『わが国における・果物生産を阻害してきた果樹病害—その史的考察』A4版, 213頁, 発行：平成16年11月(財報農会受託刊行図書)

本書はわが国の主要果樹の栽培においてこれまでどのような病害が発生し、それがどのようにして解決されたかを災害史的、研究史的に解説したものである。対象果樹はカンキツ、リンゴ、ニホンナシ、セイヨウナシ、モモ、ウメ、スモモ、オウトウ、ブドウ、カキ、クリ、ビワ、イチジク、キウイフルーツで、それぞれの果樹ごとにどんな病気か、記録に登場し始めてから今日までの状況、病原菌の学名が落ち着くまでの変遷、防除法の変遷、小括、引用文献の順で解りやすく展開されている。いずれも重要事項を適宜選択してあり、簡潔にして要を得ている。このほか共通病害として赤衣病、環紋葉枯病、白紋羽病と紫紋羽病がとりあげられ、また巻末に主要果樹病害初発生期の年譜がある。

著者佐久間氏は北海道立農業試験場、北海道農業試験場、果樹試験場(盛岡支場、のち本場保護部)に勤め長く果樹病害の研究に携われ、1993年退官後は国際協力事業団のプロジェクトを通じて数年間ネパールやウルグアイの園芸開発、果樹保護技術改善計画等に参加された。そして第一線

を退かれた後、果敢に本書執筆に取り組み、出版に至ったことは喜ばしいことである。果樹病害の参考書あるいは教科書として利用をお薦めしたい。なお本書は自費出版で、購入希望の方は(財)報農会（電話 042-381-5455）にご連絡下さい。（原田幸雄）

(2) 高松 進・小林一成・吉岡博文・豊田和弘 編著：
『植物病の探求 In Pursuit of the Essence of Plant Pathogenesis』A4判, 188頁, 発行2004年9月「植物病の探求」出版会2500円

久能 均前三重大学教授（元日本植物病理学会長）の退官を記念し、72名の編著者によって執筆された本著は、3章から構成されている。第1章は「防御応答」、第2章は「病原性」、第3章は「防除」と題され、最先端の分子生物学的研究成果から農業の現場に密着した研究、さらには生物農薬の開発や食の安全と農業に関する問題提起まで幅広い分野に及んでいる。それは、英文の題名でもある pathogenesis, すなわち病原と植物とが遭遇して病気が引き起こされるまでのすべての過程への理解を深める目的で本書が執筆されているためであろう。題材となる糸状菌、細菌、ウイルスは、それぞれの執筆者がもっとも得意とする病原であり、最新の研究成果をもとに病原と植物との関わりが植物側の防御反応、あるいは病原側の感染戦略という両面から学ぶことができる。また防除に関しても、病害の発生生態の解明とその成果に基づく防除法の開発について、それぞれの研究の道筋をたどることができる。

このように本書の内容は多岐にわたり、またそれぞれの執筆者が最も自信をもって世に問う研究成果でもあるため、決してやさしい内容とはいえない。しかし、各章各項を短く区切り、各項に適切なイントロダクションをつけ、さらに重要な用語や内容については欄外でも解説するなど、読者の理解を容易にするための様々の配慮がされている。植物病理学に興味をもち一通りを勉強した学生、院生、あるいは若い研究者が読めば、先輩研究者の思考をたどりながらその研究成果を理解するという、大きな知的満足感が得られるものと思う。

私たちは、ともすればごく狭い研究対象分野にのみ焦点を絞りがちである。しかし、研究のある段階では周りを見回し、自分の研究を俯瞰する必要がある。Pathogenesis をキーワードとした本書は、私たちにそのような俯瞰の機会を与えてくれるのではないだろうか。尚、販売は三重大学植物感染学研究室（chiharu@bio.mie-u.ac.jp）のみで行われている。（夏秋啓子）

【学会ニュース編集委員会コーナー】

編集委員会報告

3月30日12時より約1時間、学会ニュースの編集委員会が開催され、今後1年間の編集スケジュールが確認された。

情報提供および投稿のお願い

本ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを主旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せ頂きたくお願いいたします。

投稿宛先：〒170-8484 豊島区駒込1-43-11

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX: 03-3943-6086

または下記学会ニュース編集委員へ：

松山宣明、加来久敏、夏秋知英、堀江博道、富岡啓介、各委員宛

編集後記

学会ニュース第30号をお送り致します。平成17年度大会は3月29日から31日までの3日間にわたり静岡市で開催され、成功裡に無事終了しました。大会委員長を務められた静岡大学の露無慎二先生、瀧川雄一先生を始め地元関係者の皆様、プログラム関連でご尽力頂いた名古屋大学の皆様方に心から御礼申し上げます。さらに新旧学会長を始め学会事務局の皆様方には誠にご苦労様でした。学会に前後して開催された諸研究会も多数の参加者があり盛会であった由、報告が参っております。

また、平成16年度の諸委員会の報告を掲載致しましたが、日本農学会からは名古屋大学の道家紀志教授が見事「日本農学賞」及び「読売農学賞」を受賞された由、報告がありました。心よりお祝い申し上げます。

さて、第2回教育プログラムは東京大学難波成任先生のお世話で8月15日（月）から19日（金）までの5日間、東京大学農学部で開催されます。本号に挿入の「開催のお知らせ」をご覧下さり早急にお申込み下さい。その他、本年度開催予定の談話会、学会部会の開催予定を掲載致しました。（松山宣明）
